

# 平成28年度資源評価報告書(ダイジェスト版)

[Top](#) > [資源評価](#) > [平成28年度資源評価](#) > [ダイジェスト版](#)

標準和名 ヤナギムシガレイ

学名 *Tanakius kitaharae*

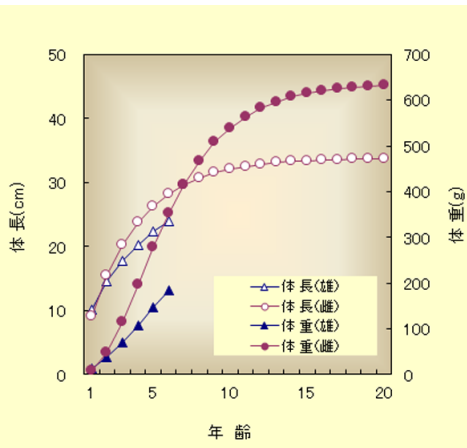
系群名 太平洋北部

担当水研 東北区水産研究所



## 生物学的特性

寿命： 雄6歳、雌20歳（ほとんどは10歳以下）  
成熟開始年齢： 雄：2歳（大部分）、雌：2歳（一部）、3歳（100%）  
産卵期・産卵場： 1～6月、盛期は1～3月、水深100m前後の沿岸各地  
食性： 主に多毛類と甲殻類  
捕食者： 不明

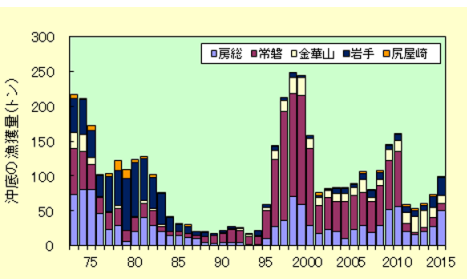
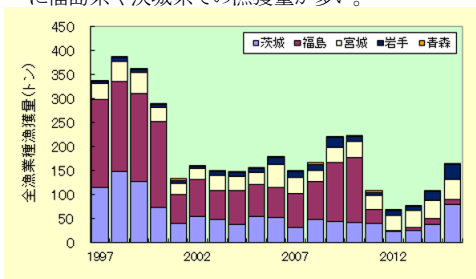


## 漁業の特徴

主に沖合底びき網漁業(沖底)で漁獲され、次いで小型底びき網漁業による漁獲が多い。主漁場は水深50～200mで、繁殖期の冬場は80～100m、その他の時期は120～140mで漁獲が多い。

## 漁獲の動向

漁獲量は1997～2000年には288～386トン进行録していた。2001～2008年には133～179トンでピークの半分以下で推移していたが、2009、2010年には220トン前後に増加した。震災以降は減少したが回復傾向にあり、2015年には162トンとなっている。沖底の漁獲量は長期的に大きく変動しており、2015年は98トンであった。総漁獲量、沖底共に福島県や茨城県での漁獲量が多い。

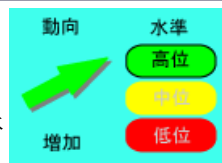


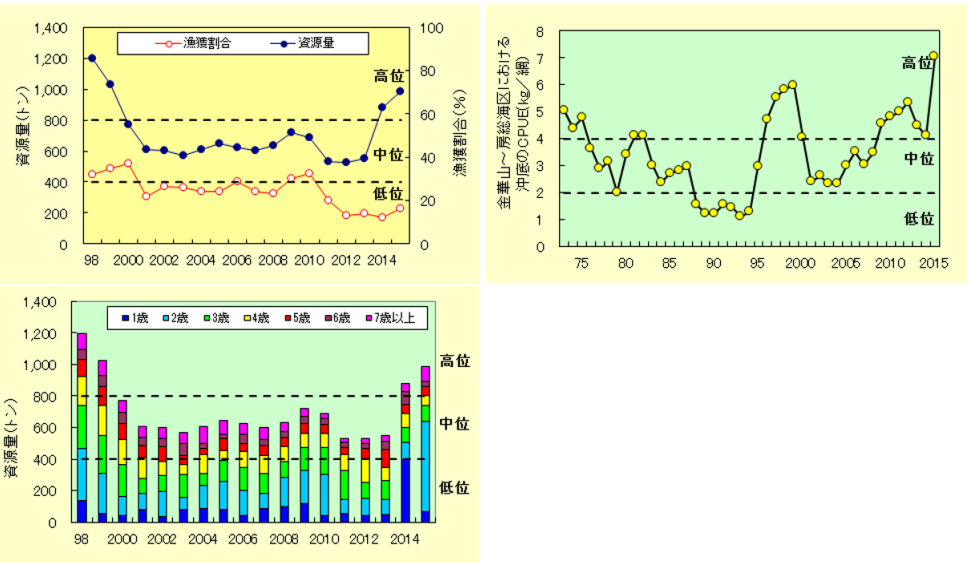
## 資源評価法

1998～2015年に茨城県又は福島県で漁獲されたヤナギムシガレイの年齢別漁獲尾数を基に、コホート解析により資源量を推定した。推定された資源量と沖底(金華山～房総海区)の単位努力量当たり漁獲量(CPUE)に基づき、資源水準および資源動向を判断した。

## 資源状態

資源量は1998年の1,198トンから減少し、2001～2013年は529～720トンで推移していたが、2014年は880トン、2015年は986トンと増加傾向である。これは2013年級が非常に多かったことに加えて、主漁場である常磐海域の漁獲圧が極めて低いため、2歳までの生き残りがよかったためと考えられる。沖底の金華山～房総海区のCPUEおよび資源量の最大値と0の範囲をそれぞれ3等分し、水準の判断基準とした。その結果、2015年のCPUEおよび資源量は上昇および増加しており、ともに高位と中位の境界の上にあることから、資源水準は高位と判断した。また、最近5年間(2011～2015年)のCPUEおよび資源量の推移から、動向は増加と判断した。





管理方策

現在の資源は幅広い年齢層で構成されているのが特徴となっており、比較的安定している。今後も漁獲圧を高すぎないように抑え、次世代の加入を阻害しないように親魚量を確保することが重要である。また、近年には大きな加入もあったことから、一定の親魚量が維持できれば、資源が急激に減少することはないと考えられる。そのため、親魚量を一定水準確保することを管理目標とし、F30%SPRを基準値として2017年ABCを算定した。

| 管理基準    | Target/Limit | F 値  | 漁獲割合 (%) | 2017年ABC (トン) | Blimit=     |
|---------|--------------|------|----------|---------------|-------------|
|         |              |      |          |               | 親魚量5年後 (トン) |
| F30%SPR | Target       | 0.35 | 23       | 259           | —           |
|         | Limit        | 0.44 | 27       | 312           | —           |

- Limitは、管理基準の下で許容される最大レベルの漁獲量
- Targetは、資源変動の可能性やデータ誤差に起因する評価の不確実性を考慮し、管理基準の下でより安定的な資源の増大または維持が期待される漁獲量
- ABC算定規則1-3)-(1)を用い、 $F_{limit}=F30\%SPR$ 、 $F_{target} = \alpha F_{limit}$ とし、係数 $\alpha$ には標準値0.8を用いた
- F値(漁獲係数)は各年齢の平均値である
- 漁獲割合は2017年漁期のABC/資源量

資源評価のまとめ

- 資源量と沖底の金華山～房総海区のCPUEから資源状態を判断した
- 資源水準は高位、動向は増加
- 資源量は2014年以降増加し、2015年は986トンになっている

管理方策のまとめ

- 現在の資源は幅広い年齢層で構成されているのが特徴となっており、比較的安定している
- 次世代の加入を阻害しないように親魚量を確保することが重要である
- 近年には比較的大きな加入もあったことから、親魚量を一定水準確保することを管理目標とした

執筆者: 成松庸二・服部 努・鈴木勇人・柴田泰宙

資源評価は毎年更新されます。